

今日の福音の二人の兄弟のイエスさまのお話は、誰にとっても分かりやすいお話のように思えます。ある父親が二人の息子のそれぞれに、「今日はぶどう園へ行って働きなさい」と言いつけたところ、兄のほうは、初め「いやです」と素っ気なく応えたけれども、後になって考え直して、父親の言いつけどおりにぶどう園へ出かけて行きました。ところが、弟のほうは、父親の言いつけに対して「お父さん、承知しました」と答えだけはよかったです。結局ぶどう園へは行かずじまいだったのです。このようなお話をされたイエスさまは、「二人のうちどちらが父親の望みどおりにしたか」とお尋ねになっています。イエスさまにそのように尋ねられたら、私たちも皆、「兄のほうです」と応えざるを得ません。

けれども、そう答えた後で、私たちは少し不安になるのではないのでしょうか。何故かと言うと、イエスさまは何故このようなお話をなさったのだろうかということが気になるからです。イエスさまは私たちにそのような不安を感じてほしくて、このお話をなさったのかもしれない。「そう言えば」と私たちは思い出すはずで、私たちも下の息子のように「お父さん、承知しました」と答えておきながら、そのまま忘れてしまっていることが多くあるはずだからです。子供の頃、よく母親に「お前は返事だけはいいいんだけどね」と言われたことを思い出します。その子供の頃の自分は今も変わっていないと気付かせられることが、この年になってもしばしばです。そろそろ、「はい承知しました」と引き受けたはずのことを、済ませておかなければと反省させられます。

今日の福音の二人の兄弟の、イエスさまのお話だけを取り上げて考えてみれば、それは誰にとってもそう難しい、理解できないお話ではないはずです。けれども、それに続く、今日の福音の後半のイエスさまのおことばは、その前の、二人の兄弟のお話とどう結ばれているのでしょうか。

二人の兄弟のお話は、「ところであなたたちはどう思うか」というおことばで始まっています。そして、後半の部分のイエスさまのおことばを見て行くと、「はっきり言うておく、徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たち信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」と結ばれています。イエスさまがここで「あなたたち」と直接に呼びかけておられるのは、マタイ福音書のもう少し

前から読み直してみると、エルサレムの神殿の祭司長や、ユダヤの民の長老たちであることが分かります。この人たちは、イエスさまの時代のユダヤで最も大きな権威を持っていた最高法院と呼ばれる会議の指導者たちです。その最高法院のメンバーの中には、律法学者やファリサイ派の人々も多く含まれていました。ローマ帝国の支配下にあったイエスさまの時代のユダヤにおいては、エルサレムの神殿を中心としたこの最高法院のメンバーによる権威ある決定が、ユダヤの人々の日常的な宗教的、社会的生活の指針となっていました。そのような意味で、この人々は、旧約聖書のことばで表現すれば、イスラエルの牧者であるべき人々だったのです。イエスさまを十字架の刑に処するように、ローマの総督ポンティオ・ピラトに引き渡したのも、この最高法院の決定によることであつたのです。

イエスさまにつき従って来た人々の熱狂的な歓呼のうちにエルサレムの町に入られたイエスさまは、いけにえのための動物を売っていた商人や両替商たちを神殿の境内から追い出し、神殿の境内で公然と人々に教えを宣べておられたのです。そのようなことを見過ごしておくことが出来ない祭司長や長老たちは、「何の権威があつてこのようなことをするのか。誰があなたにそのような権威を与えたのか。」とイエスさまに詰め寄ります。それに対して、イエスさまは、御自分に先立って人々に大きなインパクトを与えた、あの洗礼者ヨハネの権威は何によるものだったかと問い返されたのでした。今日の福音はユダヤの指導者たちとのそのようなやり取りの中でイエスさまが語られたおことばです。

「ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたがたは信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じた。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとはしなかった。」と今日の福音の最後にイエスさまは言っておられます。洗礼者ヨハネが示した義の道とは、神さまの前に義とされる道です。神さまの前に義とされるのが救われるということです。洗礼者ヨハネは神さまに遣わされてそのような義に至る道、救いへの道を示した。徴税人や娼婦といった、自分は罪人でないと思っている人々からは、罪人の代表のように思われている人々が、そのヨハネの教えを受け入れて神さまの義の道、救いへの道を信じたのに、あなたたちは信じようとしなかったとイエスさまは言われているのです。

そのようなイエスさまの主張の中で、今日の福音の最初の二人の兄弟のお話は語られているのです。そのようなイエスさまの思いに沿って、あらためて二人の兄弟のお話を考え直してみるとすると、どういうことになるのでしょうか。

今は秋の収穫の時期ですが、ぶどう園が一番忙しくなるのもぶどうの収穫の時です。父親が息子たちにぶどう園に行きなさいと言つたのも、そのような収穫のときを迎えていたからでしょう。息子たちが出かけてゆくように言われた

ぶどう園は父親のぶどう園です。息子たちにとっても、それは自分の家のぶどう園です。「今日はぶどう園に行って働きなさい」と息子たちを送り出そうとした父親の思いは、父親のぶどう園の収穫の喜びを、息子たちにも知ってほしかったからにちがいません。行って、あなたたちだけで働けというのではないのです。すでに収穫が始まっているぶどう園に行って、その手伝いをすることによって、収穫の喜びを息子たちにも味わってもらいたいというのが父親の思いだったのです。

父親の言いつけに、兄のほうははじめ「いや」ですと答えたのですが、後で考え直して、父親が言ったことに従ったのでした。何故考え直すことが出来たかという、父親の言いつけがずうっと心の中に重くのしかかっていたからです。徴税人や娼婦といった人々の心の内にもそのような思いがあったにちがいません。自分たちは自分たちの生き方によって、父親である神さまの思いから遠くはなれて生きている、徴税人や娼婦たちの心の中にはそのような思いがずうっと重くのしかかっていたにちがいません。だから、彼らは洗礼者ヨハネの説教を聴いて、神さまが示してくださった義の道を、救いへの道を受け入れることが出来たのです。

それに対して、弟のほうは、父親の言いつけを無視して好き勝手なことをして遊んでいたわけではないかもしれません。むしろ彼は、父親の言いつけにはいつも「はい承知しました。」と答えていたのでしょう。その結果、彼にはやるが多すぎたのです。父親の言われたとおりに生きようとして、煩雑な家事に追われて、父親が今日だと言った、ぶどう園に出かけてゆくことを後回しにしてしまったのです。彼には、その煩雑極まる日常の家事の中で、自分は父親の言いつけどおりにしているのだという自負がありすぎたのです。その結果、父親が望んでいた父親のぶどう園の収穫の喜びをついに味わうことはなかったのです。イエスが二人の兄弟の話をしたのは、まさに、この弟のように生きていた、ユダヤの指導者たちに考え直してほしかったからです。

洗礼者ヨハネの働きは、人々に神の義を示して、人々を救いへと招く、天の国の収穫の始まりだったのです。イエスさまがなさろうとしておられることも、そのような天の国へと人々を招く、神さまの収穫のみわざなのです。

考え直す、イエスのみことばの前に、自分の信者としてのあり方を考え直すということが、今日の福音の中心的メッセージです。収穫の秋、神さまが私たちに望んでおられる収穫の喜びに与る恵みを願って今日のミサをおささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高